

『エロディアード』から『イジチュール』へ

— 見る目と見られるもの —

重 光 マリ子

「エロディアード」と「イジチュール」とは、ともに相接し相対峙して、マラルメの精神のその全発展過程における最も重要な転機がいかなるものであったかについて、我々に告げるところのきわめて重要な作品である。本稿では主として「エロディアード」（あるいは「エロディアード」まで）と「イジチュール」とにおいてみられる欲望あるいは見る目とそれと関係する事物あるいは見られるものとの役割の変化、相違に視点をおいて、筆者の微力の及ぶかぎり論述してゆこうと思う。が、マラルメの場合、すべてが分かちがたく相互に緊密に関連しあっているので、同時にいくつかの他の重要な問題にも言及せざるを得ぬ事を許されたい。

※※※

si le Rêve était ainsi défloré et abaissé, où donc nous sauverions - nous, nous autres malheureux que la terre dégoûte et qui n'avons que le Rêve pour refuge? O mon Henri, abreuve - toi d'Idéal. Le bonheur d'ici - bas est ignoble -
(V.M., p.92)

これは、1863年、当時21歳のマラルメが、友アンリ・カザリスにあてた手紙の中の一文である。夢は現世に嫌厭を覚えざるを得ぬ不幸な者達の唯一の避難所であるというこの手紙に語られている思想は、確かに決して新しいものではなく、特にロマン主義以降称揚されて繰り返される思想である。こうした思想にもみられるように、後に全く独自の孤絶せる詩境を開く事となる詩人も、その始めにおいては、やはりロマン主義の水を掬する者であった事は、等閑に付されてはならない事であろう。

ところで、「イジチュール」においてイジチュールの先祖達が最初にであったといわれているところの難破が、この現世に対する嫌厭であり、難破から先

祖達を救ったといわれているところの城が、この夢ではなかったかと思われる。
depuis qu'ils (ils=les ancêtres immémoriaux) ont abordé ce château
dans un naufrage sans doute - (O.C., p.451)

詩人にとっては、夢は単なる慰めや気晴らしのためのものではなくて、生の救済の場なのである。何故なら詩人は夢に現実がもたぬもの、高貴なもの、無限なもの、永遠なもの、すなわち美を見るのであり、詩人の精神は美を見る事によってのみ息づくのであるから。

Je fuis et je m'accroche à toutes les croisées
D'où l'on tourne l'épaule à la vie, et, béni,
Dans leur verre, lavé d'éternelles rosées,
Que dore le matin chaste de l'Infini

Je me mire et me vois ange ! et je meurs, et j'aime
- Que la vitre soit l'art, soit la mysticité -
A renaître, portant mon rêve en diadème,
Au ciel antérieur où fleurit la Beauté !

((Les Fenêtres)) : (O.C., p.33)

詩人をして、このような美を見る事を可能とせしめる詩人の中なるものは何であるのか。それとも美は、ロマン主義者達の多くによってしばしばそう信じられたように、美なるかなたの世界の不意の反映にすぎないのか。上記の詩、「窓」は、なおこうしたロマン主義的思想の傾向の中にあるように思える。だが後年の詩「散文」では次のように表わされる。²⁾

Telles, immenses, que chacune
Ordinairement se para
D'un lucide contour, lacune,
Qui des jardins la sépara.

Gloir du long désir, Idées
Tout en moi s'exaltait de voir
La famille des iridées
Surgir à ce nouveau devoir,

((Prose)) : (O.C., p. 56)

《長い間の欲望の栄光》。《私のうちなるすべては高揚して》。美を見る事へと詩人を衝き動かしかきたてるのは、美に渴き美を求める精神の欲望である。そして美を現出させるのもまた、美への欲望によって営まれる精神の働きである。

En vue qu'une attirance supérieure comme d'un vide, nous avons droit, le (le=un jeu) tirant de nous par de l'ennui à l'égard des choses si elles s'établissent solides et prépondérantes — éperdument les détache jusqu'à s'en remplir et aussi les douer de resplendissement, à travers l'espace vacant, en des fêtes à volonté et solitaires.

((La Musique et les Lettres)) : (O.C., p. 647)

事物をその堅固な日常の様態から狂ったように激しく引き離す《真空のようなすぐれた力》ということばは、前記の「散文」の中の《花を庭園から分離した空隙》ということばと呼応するとは考えられないだろうか。真空、空隙、すなわち何も無い空間である。そしてもしもこの何も無い空間を精神空間だとすれば、何もない空間のもつ力とは、一般に欲望と呼ばれているところのものであるとは考えられないだろうか。すなわち、精神はその欲望の力によって事物を日常の様態から引き離し、自らの空虚のうちにとり入れて、事物に輝きを付与するのである。³⁾ 事物を非事物化し、美を求める精神にとって意味あるもの、美なるものとする、すなわち美しいイマージュと化すのである。

例えば、マラルメの詩の世界においてはきわめて重要な意味をもつ鏡という事物についてみれば、日常においては倦怠に冷たく凍る鏡は、詩人の欲望に燃える熱い眼差しのもとに溶解し、水面と変じて、ある時には白鳥を、またある時には水の精を宿すのである。

O miroir !

Eau froide par l'ennui dans ton cadre gelée

((Herodiade)) : (O.C., p. 45)

Pas de clapotement ! L'eau morne se résigne,

Que ne visite plus la plume ni le cygne

Inoubliable: ((Hérodiane)) : (O.C., p. 41)

Elle (Elle=une nixe), défunte nue en le miror,
((*Ses purs ongles très haut leur onyx*))

(O.C., p.69)

そして、詩人の眼差しはただひとつの事物に限られる事はないであろうから、様々の事物およびそれら事物相互の様々な関係から様々の美しいイメージが誕生する事であろう。

(...), comparer les aspects et leur nombre tel qu'il frôle
notre négligence: y éveillant, pour décor, l'ambiguïté de
quelques figures belles, aux intersections.

((*La Musique et les Lettres*)): (O.C., p.647-648)

また、精神の営みは決して固定的なものではないから、それに応じて様々の美しいイメージは音楽的に展開してゆく事であろう。⁴⁾

Ajoute, pour plus de terreur, que toutes ces impressions se
suivent comme dans une symphonie,

((Lettre de Mallarmé à Cazalis : mars, 1865)): (V.M., p.161)

こうして生まれるまさに怖ろしいまでの夢の美こそ、エロディアドが、
J'ai de mon rêve épars connu la nudité!

((*Hérodiade*)): (O.C., p.45)

と呼ぶところのその《私の散らばった夢の裸体》ではなかつたろうか。⁵⁾

ところで、詩人の詩人としての仕事は、単に夢みる事にあるのではなく、夢を詩作品に結晶させて、自らの生の場の存在を証す事にある。しかしながらきわめて音楽的に成起するイメージの世界である夢を、ことばによって完璧な形でとらえる事は不可能な事だといってよいだろう。だが詩人はあえてこの不可能事に挑む。

J'ai pris un sujet effrayant, dont les sensations, quand elles
sont vives, sont amenées jusqu'à l'atrocité, et si elles flottent,
ont l'attitude étrange du mystère. Et mon vers, il fait mal
par instants et blesse comme du fer! J'ai, du reste, là,
trouvé une façon intime et singulière de peindre et de noter
des impressions très fugitives.

((Lettre de Mallarmé à Cazalis : mars 1865)): (V.M., p.161)

この手紙の中で《私は見出した》といわれているところの《きわめてうつろ
やすい印象を描き記す内密の特異な仕方》⁶⁾なるものが、実際にいかなるもの
であったのかは定かではないが、少なくとも印象のうつろいやすさに呼応する仕
方であった事だけは確かであろう。すなわち流動性をもった方法なのではなかつ
たかと思われる。

しかしながら、そうした方法によって、（そしておそらくそうした方法を介
して始めて）、明らかとなったのは、夢の完璧な作品化への可能性ではなくて
夢の本質である。⁷⁾

Malheureusement en creusant le vers à ce point, j'ai rencontré
deux abîmes, qui me désespèrent. L'un est le Néant ...

(...) ce Rêve qu'elle (elle=la matière que je suis) sait
n'être pas,

((Lettre de Mallarmé à Cazalis : mars, 1866)) : (V.M., p.193)

夢の本質、すなわち非存在性、虚無性である。この虚無との遭遇によってひ
きおこされるのが、「イジチュール」でいうところの第二の難破である。

Cela (...) – second naufrage de quelque haute visée.

(O.C., p.451)

そしてこの虚無との遭遇は「エロディアード」にすべてをかけて専心したそ
の果てにである。

Hérodiade, où je m'étais mis tout entier sans le savoir,
d'où mes doutes et mes malaises,

! ((Lettre de Mallarmé à Cazalis, juillet 1866))

(V.M., p.211)

「エロディアード、I、序曲」は、こうして夢の美の城の廃墟の描写と悲嘆
とで始まる。

Abolie, et son aile affreuse dans les larmes

Du bassin, aboli, qui mire les alarmes,

Des ors nus fustigeant l'espace cramoisi,

Une Aurore a, plumage héraldique, choisi

Notre tour cinéraire et sacrificatrice,

Lourde tombe qu'a fuie un bel oiseau, caprice

Solitaire d'aurore au vain plumage noir ...

Ah ! des pays déchus et tristes le manoir !

(O.C., p.41)

それでは、こうした城の美姫である主人公エロディアードとは、何であったというべきなのだろうか。

J'aime l'horreur d'être vierge et je veux

Vivre parmi l'effroi que me font mes cheveux

Pour, le soir, retirée en ma couche, reptile

Inviolé sentir en la chair inutile

Le froid scintillement de ta pâle clarté

Toi qui te meurs, toi qui brûles de chasteté,

Nuit blanche de glaçons et de neige cruelle !

Et ta soeur solitaire, ô ma soeur éternelle

Mon rêve montera vers toi : telle déjà,

Rare limpidité d'un coeur qui le songea,

Je me crois seule en ma monotone patrie

Et tout, autour de moi, vit dans l'idolâtrie

D'un miroir qui reflète en son calme dormant

Hérodiade au clair regard de diamant ...

O charme dernier, oui ! je le sens, je suis seule.

((*Hérodiade*)) : (O.C., p.47 - p.48)

上記のエロディアードのことはも告げているように、(少くとも筆者にはそう思えるのだが)、主人公エロディアードとは、たとえそれが虚しいものであったとしても、あくまで至純なる夢の美に生を賭けて生きんとする詩人の精神の化身ではなかつた⁸⁾だろうか。

Hérodiade : la jeune intellectuelle !

((dans les petits papiers crayonnés de Mallarmé))

(V.M., p.777)

であるから、エロディアードとは、王族の存亡の危機にのぞんでもなお、真理による救済を求める事をかたくなに拒み、夢の美に生きてきた王族の奢りを最も冷厳に保持し続けようとした夢の美に傲れる、そして夢の美を見るおのれ

自身に傲れる最後の者であったともまだいえよう。

※※※

comme cette fiole contient le néant par ma race différé jusqu'à
moi (ce vieux calmant qu'elle n'a pas pris, les ancêtres
immémoriaux l'ayant gardé seul du naufrage), je ne veux
pas connaître le Néant, avant d'avoir rendu aux miens ce
pourquoi ils m'ont engendré -

((*Igitur*)) : (O.C., p.450 - p.451)

夢に逃れ夢に生きたマラルメ以前の詩人達の中にも、夢の虚しさに直面したもののいないわけではいうまでもなく決してないが、だが夢の虚しさが何を告げているものであるのかを、まさにその虚しさの中からくみとり明らかにしようとあえてした詩人はなかったのではないだろうか。それをあえてなしたマラルメの存在の歴史的意義の大きさ、重さが認識されねばならないだろう。すぐれて意識的な詩人であったマラルメは、自身の行為に、彼ひとりの詩人としての命運が賭かっているのみならず、夢を糧として生きてきた彼以前の詩人達の行為の意味、存在の意味もまた賭かっているのである事を、明瞭に意識していたと思われるのである。

夢が虚しいものであるからといって、詩人には、直ちに自分をも含めて夢に生きた詩人達の行為の意味、存在の意味までをも否定しざる事はできない。だからといって、エロディアドのように夢の美に頑なに傲り続ける事もまたできないであろう。一度夢の虚しさを決定的に知らされた者には、もはやその虚しさを忘れ去る事はできないだろうから。第二の難破はのりこえられねばならない。あらたな城が、あるいはあらたな島が見出されねばならない。

un naufrage cela direct de l'homme

((*Un coup de dés*)) : (O.C., p.462-463)

それにしても、何故詩人達は夢に逃れたのだったか。そこに美を求め美を見たからではなかったか。何かしら永遠なもの、無限なものを感じ取ったからではなかったか。無意味な愚劣な現実に対して、意味ある優れたものを感じ取ったからではなかったか。

そうした美は、そうした永遠、無限の感覚は、そうした意味性は何に由来するのか。

詩人は、今や生のために、美をではなくて、意味を必要とし意味を求める。何故自分にはぐくまれたのか、《そのわけ》を、存在理由を、根源的意味を求める。1866年7月オーバネルにあてた手紙の中で、

Tout homme a un Secret en lui, (V.M., p.212)

と述べるに至るであろうところのまさにその《秘密》を求める。

ところで、詩人の部屋は、それまでは夢の現出の時の部屋、すなわち夢の場としてあった。

la vision d'une chambre du temps où le mystérieux ameublement
arrête un vague frémissement de pensée, lumineuse brisure du
retour de ses ondes et de leur élargissement premier,

((*Igitur*)) : (O.C., p.435)

であるから、詩人は部屋の中の様々な事物に、(とりわけ鏡については特にいわれねばならぬ事だが)、幾度も幾度も輝きを、従って意味を与える事を繰り返し返してきたのである。また夢の消滅のつどに、あるいは詩作に苦しむたびに様々な事物に悲嘆を投げかけ、悲嘆をこめてきたに違いない。すなわち、部屋は思い出に満ちているといえよう。こうして長い間夢に生きてきた詩人、だから夢の場である部屋に生きてきた詩人にとっては、部屋はすでに充分詩人の精神空間に等しいものとなっているとはいえないだろうか。

だとすればおそらく、根源的な意味を求める詩人の眼差しは、自らの中なる精神空間の内部をみつめるがごとくに、ほとんど精神空間に等しい部屋の内部をみつめるであろう。何故なら部屋は目に見えるものであり、目に見える事によって、目には見えない精神空間のあり様を明らかになしうるのであるから。すなわち象徴するであろうから。

est-ce qu'un fait spirituel, l'épanouissement de symboles
ou leur préparation, nécessite endroit, pour s'y développer,
autre que le fictif foyer de vision dardé par le regard
d'une foule ! Saint des Saints, mais mental ...

((*Richard Wagner*)) : (O.C., p.545)

従って、部屋の中の事物は、もはや夢を喚起するもの、美しいイメージと化す事が求められているものとしてではなくて、精神空間をあらわす象徴として、意味を告げる象徴としてみられているという事である。

たとえば、鏡において詩人が今や見る事を望んでいるのは、鏡が水面と変じ水の精や白鳥を浮かべるといった夢ではもはやなくて、鏡が象徴として精神の事からについて告げるところのものである。こうして詩人の思惟は、たとえば鏡をとおして、

la vision importune de personnage qui nuisait à la pureté
de la glace chimérique

((*Igitur*)) : (O.C., p.445)

といった段階から、

je voyais le personnage d'horreur, (...), et se former
en raréfiant la glace jusqu'à une pureté inouïe, - jus-
qu'à ce qu'il se détachât, permanent, de la glace ab-
solument pure,

((*Igitur*)) : (O.C., p.441)

といった段階へと進んでゆくのである。イマージュを宿す鏡の虚無は、イマージュを宿す精神の虚無を象徴している。

「エロディアード」にあっては、部屋はなお夢の場である事が求められたに
対して、「イジチュール」の部屋はまさに象徴の部屋と化しているといえよう。

ところで鏡という事物=象徴は、同時に鏡ということば（あらわし告げるもの）でもまたあるとはいえないだろうか。部屋という事物=象徴は、部屋ということばでもまたあるとはいえないだろうか。事物=象徴を見るときは、同時にことばを見るときでもまたあるとはいえないだろうか。

ことばを詩人自ら案出するのではなく、ことばをまさしく目で見るといった状況の起こるに至る時、主導権はもはや詩人ではなく、ことばそのものにあるとさえいえるだろう。

Les mots, d'eux-mêmes, s'exaltent à mainte facette re-
connue la plus rare ou valant pour l'esprit, centre de
suspens vibratoire; qui les preçoit (...), projetés, en
parois de grotte, ((*Quant au livre*)) : (O.C., p.386)

L'oeuvre pure implique la disparition élocutoire du
poète, qui cède l'initiative aux mots,

((*Crise de vers*)) : (O.C., p.366)

詩人はこうした精神空間=部屋を、偶有的、有限的存在にすぎぬ自らのもの
と考えるには、その不思議、神秘にあまりにも強くうたれるのである。

L'homme, puis son authentique séjour terrestre, échangent
une réciprocité de preuves.

Ainsi le Mystère. ((Richard Wagner)) : (O.C., p. 545)

Une salle, il se célèbre, anonyme, dans le héros.

((Quant au livre)) : (O.C., p. 371)

部屋は、今や、神秘なることばの部屋でもまたあるといえよう。

では、こうした事物=象徴=ことばによる思惟の果てに見出されたものは、
結局何であったのだろうか。

要するに、客体としての夢から、その夢を生む主体としての精神（あるいは
自己意識）へと、根源的意味を求める眼差しは移っていったという事。¹⁰⁾

en vain, (...), la vision d'un lieu apparaissait - elle
encore, (...), la symétrie parfaite des déductions pré-
vues démentait sa réalité; il n'y avait pas à s'y trom-
per c'était la conscience de soi (...) - sa réussite.

((Igitur)) : (O.C., p. 437 - p. 438)

事物に輝きを与え夢を生む精神、夢の美の、それについての永遠・無限の感
覚の、意味性の由来するところが精神であるとするなら、精神こそ美なるもの、
永遠、無限なるもの、¹¹⁾意味あるものとみなすべきではないか、という事である。
すなわち、夢の虚無を生む精神の虚無をこそ意味あるものとして肯定し、断言
するに至るのである。

従って、マラルメが1866年7月カザリスにあてた手紙の中で、
après avoir trouvé le Néant j'ai trouvé le Beau,

(V.M., p. 211)

といっているところの《美》なるものは、もはや幼想的な夢の美ではなくて、
夢の美を生み内包する精神そのものの美であると思われる。

こうして精神それ自体に美を見出した詩人のその後の仕事は、だからもはや
単に夢の美を描出する事ではなくて、詩人にとっては母なる大地ともいべき
精神の美を讃え歌う事であるだろう。¹²⁾

L'explication orphique de la Terre, qui est le seul devoir

du poète et le jeu littéraire par excellence:

((*Autobiographie*)) : (O.C., p.663)

それは、より具体的には、精神という宇宙の進展のあり様を描出する事であろう。

Je ne puis subir que les développements absolument nécessaires pour que l'Univers retrouve, en ce moi, son identité. Ainsi, je viens, à l'heure de la Synthèse, de délimiter l'OEuvre qui sera l'image de ce développement.

((Lettre de Mallarmé à Cazalis, 14 mai 1867))

(V.M., p.237)

最後に、主人公イジチュールとは何であったかについて述べておこう。

イジチュールとは、虚無という課題をのりこえる事を彼の任務として託され、その任務を、先祖達が望んだような形、夢の消滅をなくすという形によってではなかったが、別のより修れた形、精神に無限を美を見、精神の虚無をこそ存在の名に価するものとする事によって果たし終えた人物であったと思われる。(彼の死は、試みに失敗してが故の死ではなくて、任務が果たし終えられたが故の死であるだろう。)

Lui-même (=Igitur) à la fin, (...), tirera une preuve de quelque chose de grand (...)

Igitur, tout enfant, lit son devoir à ses ancêtres.

((*Igitur*)) : (O.C., p.433)

だからいうまでもなく、イジチュールもまた詩人の精神の進展の一時期をあるいは一様態を体現するものである。

※※※

Oui, que la Littérature existe et, si l'on veut, seule,
à l'exception de tout.

((*La Musique et les Lettres*)) : (O.C., p.646)

精神こそ存在の名に価すると考える詩人にとっては、精神という宇宙をあらゆる文学こそ、現実に存在する事物のうちでは唯一在るといえるものであろう。だがしかし、もしも文学さえ在るとはもはや断言できなくなるような状況

に直面したならば。もしも精神の無限性についてさえ、もはや押し隠し得ぬ疑いが決定的に生じてきたならば。おそらくそれは、マラルメの**ことば**を借りていえば、今や第三の難破に遭遇したという事なのであるだろう。その時、いかにすればよいのだろう。いかなる島に、いかなる城にたどり着けばよいのだろう。最初の難破では、世俗から幻想的な夢の部屋へと逃れられた。第二の難破では、夢の部屋から精神空間としての部屋へ転身していった。だが、第三の難破では？ おそらくその時人は部屋の扉を本当の意味で外へと向けて開かなければならないのではないだろうか。外へ？ 愚劣で虚しい世俗へ？ 否、大いなる自然へ、大いなる宇宙へ。人間精神の営みもまた、この大いなる自然の、この大いなる宇宙の営みの中のひとつの営みであるとして。まさに自然こそ、宇宙こそ、実に豊かな汲み尽くしえぬ物象の、象徴の、**ことば**の殿堂であるだろう。

人はそこに、祭典の火がいたるところに輝いているのを、永遠の祭典が無限に繰り広げられていくのを、永遠の美を見るだろう。

* O.C. = ((Mallarmé *OEuvres complètes*)) : Bibliothèque de la Pléiade : Gallimard : 1945

* V.M. = Henri Mondor : ((*Vie de Mallarmé*)) : Gallimard : 1941

注

- 1) cf. Ah ! des pays déchus et tristes le manoir !
((*Hérodias*)) : (O.C., p. 41)
- 2) 「窓」は1836年6月アンリ・カザリスにあてた手紙の中に、「散文」は1885年1月『ルヴェ・アンデパンダント』誌に始めてあらわれる。
- 3) これは、ニーチェの次の**ことば**の、まさにその逆の事実を示すもののように思われる。
「芸術的根源力を豊かさの強要をもちあわせてはいない……すなわち与える事のできない者は、何ものをも受けとる事のできないのである。」
ニーチェ、「**権力への意志 下**」(理想社) p. 269
- 4) cf. La total arabesque, qui les (les = quelques belles figures) relie, a de vertigineuses sautes en un effroi que reconnue;

et d'anxieux accords.

((*La Musique et les Lettres*)) : (O.C., p. 648)

- 5) cf. J'ai été assez heureux, la nuit dernière, pour revoir mon Poème dans sa nudité, et je veux tenter l'OEuvre ce soir.

((Lettre de Mallarmé à Aubanel, 3 mars 1866))

(V.M., p. 186)

- 6) それは『書物について』において《寸断された表記》といわれているところのものではなかっただろうか。

cf. Autrement ou sauf exécution, comme de morceaux sur un clavier, active, mesurée par les feuillets – que ne ferme-t-on les yeux à rêver? Cette présomption ni asservissement fastidieux: mais l'initiative, dont l'éclair est chez quiconque, raccorde la notation fragmentée. ((*Quant au livre*)) : (O.C., p. 380)

- 7) 『ヘルダーリンの詩の解明』の中でハイデッカーは次のように言っている。「言葉が始めてそこに於て存在が脅かされ迷わされうるにいたるような顕わなる場所を創るのであり、かくてまた存在喪失の可能性云いかえれば危険の可能性も言葉によって始めて創り出されるのである。」
ハイデッカー, 『ヘルダーリンの詩の解明』(理想社) p. 54

- 8) cf. J'ai laissé le nom d'Hérodiade pour la différencier de la Salomé, (...), l'isoler comme l'ont fait des tableaux solitaires dans le fait même, terrible, mystérieux, et faire miroiter, ce qui probablement hanta ou apparut, le chef du saint, dût la demoiselle constituer un monstre.

((Un brouillon pour la préface d'Herodiade))

(V.M., p. 777)

- 9) 『ブルーストとシーニュ』の中でジル・ドゥルーズは次のように言っている。
cf. Dans l'art, les matières sont spiritualisées, les milieux, dématérialisés. L'oeuvre d'art est donc un monde de signes mais ces signes sont immatériels et n'ont plus rien d'opaque: du moins pour l'oeil ou l'oreille artistes. En second lieu, le sens de ces signes est une essence, essence affirmée dans toute sa puissance. En troisième lieu, le signe et le sens, l'es-

sence et la matière transmuée se confondent ou s'unissent dans une adéquation parfaite. Identité d'un signe, comme style, et d'un sens comme essence: tel est le caractère de l'oeuvre d'art.

Gilles Deleuze: (*Proust et les signes*): Presses Universitaires de France: 1964: p. 64

- 10) cf. La Nuit était bien en soi cette fois et sûre que tout ce qui était étranger à elle n'était que chimère. (*Igitur*): (O.C., p. 448)
- 11) 精神と無限との関係は次のふたつの言説を比較される事によって理解されるであろう。
Son (=de la terminologie) sortilège, à lui (lui=l'art littéraire), si ce n'est libérer, (...), au livre, la dispersion volatile soit l'esprit,
(*Crise de Vers*): (O.C., p. 366)
Surprendre habituellement cela, le marquer, me frappe comme une obligation de qui déchaîna l'Infini;
(*La Musique et les Lettres*): (O.C., p. 648)
- 12) cf. Il n'y a que la Beauté, - et elle n'a qu'une expression parfaite - la Poésie.
(*Lettre de Mallarmé à Cazalis, 14 mai 1867*)
(V.M., p. 238)